日本社会教育学会　第31回研究大会　自田研究発表　資料　　1984年10月13日

戦後民衆大学運動の展開――上田自由大学を中心に――

日体桜華女子高校　山野　晴雄

〈資料1〉　上田自由大学趣意書草稿

冒頭に「学問の中央集権的傾向を打破し地方一般の民衆が其の産業に従事しつゝ自由に大学教育を受くる機会を得んが為め」との趣旨の下に創設期約十ヶ年の間全く趣旨の如き事業を遂行し一時中絶して今日に到る．其間国内の事情は全く転廻的革新に遭遇せり　此の期に際し再び自由大学の再興の愈も緊要なるを認む．惟ふに此時大戦の経過を顧るに民度の低くきは敗戦の真因を為す又開戦の無謀もこに因すと言ふも過言ならずと信ず．然して平和日本の建設は或は戦前の国家と対蹠的転進を示すと謂ども内に民度の一般的躍進が之に供はざれは真の平和国家を望むべくもなく又国際的文化の水準を維持し世界的国民として此時大戦の結果を有意義たらしめんには国民一般の文化の水準を向上せしむるにあらざれは国家組織の革新も期すべからず．こゝに国家の転向に併行し国民教育の一機関としての自由大学　の使命か創設の趣旨と一致す　の緊要の事なり　即ち大学教育の特殊的閉鎖を打開し一般民衆の前に自由なる学園として開放するは本大学の創設の趣旨にして之か民衆の手により開設維持発展は　→開設は

〈資料2〉　「上田自由大学再建の趣旨」（草稿）

冒頭に「学問の中央集権的傾向を打破し，地方一般の民衆がその産業に従事しつゝ自由に大学教育を受くる機会を得んがため」の趣旨の下に上田自由大学を創立し大正十年以后約十ヶ年に亘り哲学を基礎として文化科学一般の開講を致しましたが，一時中絶して今日に到りました．時あたかも我国は敗戦の悲境に際会して国民生活は破局に当面し民心の動向には深憂すべきものが認められます．よって吾々はこゝに　迂遠ではありますが，根本的対策と将来の民度の向上の為め　郷土の先輩の創設になる自由大学を復興し，科学的社会人教育の機関をつくることに

致しました．

この度の敗戦によって吾々は日本人の国民としての民度が如何に低いかをはっきりと知り，愈々自由大学の使命の大かつ重なる事を知りました．今後の我国は戦前と対蹠的な組織となるべく，各個人の自由が強調せられることとなります．

（強調部分）

従って民度の低い国民の自由に対する自覚が本大学の教育の中心問題であらねばなりません．

（殊に婦人の開放 ― 参政権附与 ― は，極めて其教に於て男子を超過する如き）

上田自由大学はその地方一般人の道徳と知識の向上とを目的とするは勿論この教育趣旨を国内各地に及し以て民度の向上を期するものであります．

〈資料4〉

一般青壮年，婦人を目標として日本における民主主義運動遂行の一環として，上田市を中心とする有志者により組織的な上田自由大学が創立されることになった．上田自由大学は昔って二十数年前に約十年の長きに亘って極めて堅実に持続されたが，これを再度創建し，これがため上田市祝町上田絹毛会社内に事務所を置き，民主々義的講座を開講するが本年中に大内兵衛氏の財政学若しくは平野義太郎氏の民主々義思想史になる筈である　尚米進駐軍の史学家を特に招聘してアメリカ発展史を講座の中に加える計画である

上田自由大學趣意書

◎再建の趣旨

曩に『學問の中央集權的傾向を打破し、地方一般の民衆がその產業に從事しつゝ、自由に大學教育を受くる機會を得んがため』といふ趣旨の下に上田自由大學を創立し、大正十年以後約十ケ年に亘り哲學を基礎として文化科學一般の講義を致しましたが、一時中絶して今日に到りました。[illegible]のが認められます。よつて吾々はこゝに郷土の先輩の創設になる自由大學を復興し、科學的社會人教育の機會をつくることに致しました。

この度の敗戰によつて吾々は日本人の國民としての民度が如何に低いかをはつきりと知り、念々自由大學の法令の實かつ大なる事を知りました。今後の我國は敗戰と對蹠的な組織となるべく各個人の自由が認められることゝなります。上田自由大學はこの地方一般人の思想と趣味の向上を目的とする通俗的教育機關を國内各地に及し、以て民族的向上を期するものであります。

◎講座並講師

講座	講師	講座	講師
政治學（東大教授）	大内兵衛	農業經營學（大原農業研究所々長）	吉岡金市
社會政策（元九大教授）	風早八十二	農業經濟學（元東大助教授）	山田勝次郎
〃（東北大教授）	宇野弘蔵	〃（東大教授）	近藤康男
經濟學（東北大教授）	隈部英太郎	農村經營（場長農林省畜産試験場）	新八郎
〃（九大助教授）	高橋正雄	農業機械化（岡山農業高等学校長）	橋本鑑治
唯物史觀（東大教授）	平野義太郎	文學論	尚谷テル
唯物論（元東大教授）	河上肇	演劇映畫論	土方與志
教育學（元法大教授）	城戸幡太郎	〃	久保榮
日本社會史（東大教授）	山田盛太郎	中國革命史	松本誠一
日本古代史（東大助教授）	關津正志	婦人問題	羽仁説子
明治維新史（元日大教授）	羽仁五郎	國語國字論	高木卓
日本農業史（東大教授）	土屋喬雄	アメリカ發展史	宋定

◎開講の時期

聽講生の產業を顧慮して大體次の如くに開講致します。

十月、十一月、十二月、一月、二月、三月、四月

以上各月内に二乃至三講座を開講し、其の講義を翌年度に延長します。

◎自學自習

講座の開かれて居ない期間の聽講生の自學自習を尊重し、此れが指導に適當の方策を講じます。

◎講座の年限

一講座は三年乃至四年を以て終る事にします。

◎短期講習

長期連續の講座の外に、別に短期に完結する數講座を並立した講習會を開く事もあります。

◎經費

自由大學經營の經費は聽講料及び寄付金を以て此れに充てます。

◎聽講生

講義を理解し得る各自の自信に信賴して、聽講生の資格に一切の制限を設かず、且男たると女たるとを問ひません。單に申込を以て聽講生の資格を得ます。

◎計畫

本年十二月より開講し、開學年内に少くも乃至十講座を開講し、翌學年度より更にその數を增加する樣に致したいと思ひます。

經費の一部を補助して、聽講生の自治に信賴して、聽講生の資格に一切の制限を設かず、且男たると女たるとを問ひません。單に申込を以て聽講生の資格を得ます。

尚此の自由大學運動を全國に波及して、到る處に某々支部を見、以て地方文化の程度を著しく高上せしめんがために、全國の青年と提携する事を努めます。

昭和二十年十二月二十日

上田自由大學

〈資料5〉 上田自由大学講座一覧 （判明分）

	開講期日	講師	講座	会場
1	1945.12.27~29	高倉テル	文学論	上田市鷹匠町公会堂
2	1946.2.17	平野義太郎	民主主義思想史	新工経済会上田支部
3	1946.5.3~4	高倉テル	文学論	〃 〃
4	1946.5.25~26	山田勝次郎	農業経済学	〃 〃
5	1946.6.29~30	平野義太郎	民主主義思想史	〃 〃
6	1946.7.29~30	大内兵衛	財政金融論	〃 〃
7	1946.9.7~8	羽仁五郎	歴史の革新	〃 〃
8	1946.9.28~29	風早八十二	資本論解説	〃 〃
9	1946.11.5~6	横津正志	日本古代史	〃 〃

〈資料6〉

No. 3

収入総計 4,546.00

支出 2,000.00 （党文化部基金）
1,000.00 （碓氷ウヴィーカンパ）
1,140.00 講師旅費
会場 900.00
ポップ 30.00
雑費 210.00
1,140.00
300.00 （内山・トミオカ・田中）
116.00 党カンパ
4,546.00

◎ 自由大学積立金より の立替金 500— は
小宮井氏より 戻金しました。

◎ 婦人の方の 収入を以て
世話人関係をのばかなければ ます。

お互に一史と伝統をほこる上田自由大学も敗戦後の日本に再び復活して以来、新しい時代の要求にこたえて幾多の有意義な活動をして参りましたが、その第一期の任務をほぼ果し、単なる講演会はあらゆる他の文化団体によっても随時に行はれるようになりました現在、更に一段の飛躍と向上を試みなければならないようになりました。不肖ながら大学在職人の任置を継承して参りました私たちとしては此の機会に改めて先輩の皆様の御高見を賜り、従来の実績の御批判と今後の方針についての御教示を仰ぎたいのであります。丁度興味深い開期を迎えて、自由大学に御縁故の深い皆様に御集まり願い一度、春暖懐古の御歓談のうちに楽しく今後の当大学運営の方途を探り出したいとのことであります。皆様の御意見に従い一層有意義な大学の名実を具えうる事と考えますまことに記にて恭障御繰合せの上御臨席申上る次第です。

敬具

記

日時　十一月二十六日　午後七時より八時まで

所　別所温泉　かしわ屋別館

会費　会費、夕食実費（第一、五合御持参の事）昼食携帯

参会予定者芳名　ホリユメ、カナイ、イサカ、イシイ

タケウチ（ウイジ）　ナカザワ（カマタ）　十名

上田自由大学　幹化世話人

高倉テル

山越完吾

小宮山量平

山越様